

(二) 第二段落

5 第一段落をふり返って

ヘーゲルの文章はおそろしく抽象的であるが、丹念に読み解いてゆくなら、ヘーゲルは卑近な日常のなかにある生身の人間をまるごと俎上にのせ、あるがままに存在するその人間を *Wissen* の面から、しかもその *Wissen* があらわれるがままに——原文に即せば「それ自体をあらわす(さしだす)」がままに——捉えようとしていた。

10 す(さしだす)」という表現には一考の余地があったが、これは「直接的に」や「直接的な」と同じく、考察者

ヘーゲルが自分の考える活動 (*Begreifen*) を対象におよぼしてはならないというヘーゲル自身の配慮を示すものと受けとめてよかった。第一段落全体がそのように配慮する *Begreifen* の活動によって書かれており、その配慮から生まれた思考が第一段落から読みとれる *Begreifen* の実質的な内容であると考えることさえ可能であった。

15 結局、*Begreifen* があらゆるものを統御しており、その統御のもとで *Wissen* が対象にすえられ、「それ自体を

あらわす(さしだす)」ものと設定されている——これが前述の核心が実際に意味するところである。よりわかりやすく英語の *knowledge* をもちいるなら、ヘーゲルは五感をそなえた生身の人間を *knowledge* の面から解明しようとしていると言いあらわすことができる。『精神現象学』では冒頭で一方に概念的に把握しようとかまえ

1
る考察者ヘーゲルがおり、他方にそのヘーゲルにたいして対象としてそれ自体をあらわす knowledge があるという構図が描かれていたわけである。

5
この構図は聞き上手の態度を示すとも、対象を現象するものと見る一連の思索を示唆するとも受けとめることが可能であったが、この構図が描かれる過程に問題がのこっていたことも事実である。自身の人間の素朴で日常的な生活感覚が現実とみなすものをそのまま現実とすることが可能なのか、ヘーゲルには自分の Wissen も対象にふくまれるという意識が希薄であったが、この点が以後どうなるのかという疑問である。こうした疑問はいずれ叙述の場をしつらえているはずのヘーゲルの意識がどのように登場してくるかとの関連で検討の対象になるであろう。第一段落に描かれていた構図はその最初のあらわれである。したがって今後はヘーゲルの文章をヘーゲルの語るとおりに理解するだけでなく、この構図にも着目しながら読まなければならないことになる。

10
この指摘は、前におこなった、叙述の場が生まれていないヘーゲルの文章を理解するときには、ヘーゲルの頭のなかを覗く必要がある、という指摘と軌を一にする。頭のなかを覗くということは、語られたことばの意味を理解するだけでなく、そのことばをささえる思考上の枠組や意図をとらえることも意味する。これから取りくむ第二段落ではその枠組がさらにより明瞭になり、ヘーゲルの意図もそれだけ明瞭になってくるが、その議論は第一段落以上に理解しきたい。しかも段落全体を視野にいれながら個々の部分の内容を検討しなければヘーゲルの意図がくみ取れない。『精神現象学』が二百年余にわたって難攻不落の城であったとあれば、それも当然であろう。この難解さを克服するためには、註解する者もそれを読む者も、この著作を哲学書であると受けとめる以前に、考察対象がどこにでもいる五感をそなえた生身の人間である、つまり考察対象は自分自身でもある、という点を常に念頭にたもち、辛抱強くテキストにむかうことが肝要である。

この第二段落も忍耐をもとめることでは変わりがないが、それでもこの段落は大きく四部分に分けることができ、最後まで検討するならばヘーゲルが自分自身に設定していたはずの叙述の場をかなり推測することができるようになる。最初のまとまりでは「無限に豊かな認識」と評されたものが次のまとまりになると「もつとも貧しい認識」であると評価が逆転され、五感の働きにしこまれたトリックがその逆転に関与しているなど、読者をこまらせる材料に事欠かず、このトリックに気づかないとヘーゲルがなにを考えているのかにさえ見当がつかないが、大切なことはそうした仕掛けにとらわれずにヘーゲルの意図をとらえることである。

以下、内容がわかりやすくなるように各部分を区切って訳出し、文面を検討してわかるかぎりでその部分の内容をまとめ、それから次の部分に進むという手順をとることにしよう。その際、必要に応じてのちの部分の内容を検討にくみ込み、叙述が煩雑になる弊を避けることにする。

一 最初のまとまり

これまでと同様に、日本語の翻訳書四冊と英訳と仏訳を参照しながら、原文の構造が訳文にできるように、しかも原文のままでは舌足らずになる部分にことばを補うなら、最初のまとまりは次のように訳出することが可能である。

——「**感、覚、的、確、信、の、具、体、的、内、容、は、**、**そ、れ、**（**感、覚、的、確、信、**）**を、直、接、的、に、も、つ、と、も、豊、か、な、認、識、と、し、て、**、**い、や、そ、れ、ど、こ**

一 最初の文は関係節の前で切って独立の文にし、そのあとは関係代名詞を名詞で言いかえて別の文にしてある。傍点部分は前段落のときと同じく原文ではイタリック体の語句である。

二 「感、覚、的、」の原語は *sinnlich*。英語では *sensuous*、フランス語では *sensible* がもちいられている。「確、信、」の原語は

1
るか無限に豊かな認識としてあらわれさせる。その具体的内容の広がるものとしての空間と時間のなかで、私が「たまたま自分の存在する時と場から」外へ出てゆくときにも、この充溢した豊かさから一片を自分のために切りとり、その一片のなかに入_{つて}、ゆ_く、と_きに_も、その無限の豊かさにはどのような限界も見いだすことができな_い。これ（この確信）はそれだけでなく「そのように無限に豊かな認識であるだけでなく」も_つ、と_も、真_実の、認_識としてあらわれる。なぜなら、この確信は対象からいまだ何ひとつ取りさつておらず、逆に対象をあますところなく完全な状態でそれ自体の前にもっているからである。」——

5
以上の文章からなる最初のまとまりは、第一段落と同じく語彙がおそろしく抽象的で、一読しただけではヘーゲルがなにを語ろうとしているのか皆目とらえようがない。それでも、全体をながめるなら、この最初のまとまりが、①感覚的確信は無限に豊かな認識である、②その理由ないしは事例、③この確信はもつとも真実の認識である、④その理由、と四つの部分からなることは見えてくる。訳文のそれぞれが以上の四点に対応するからである。①の実際の文は日本語として文末のぎこちなさが目だが、理解に障害となるのは訳文のぎこちなさではなく語彙とその意味にあるので、さしあたり文末のぎこちなさは度外視して、冒頭の「感覚的確信」から検討することにしよう。

10
Gewißheit. 英語で certainty、フランス語で certitude がもちいられている。その他の原語と英仏語の訳語は実際の検討の際に記す。

15
一 「無限に豊かな」を原文の構造にそくして訳すなら「無限の富をもつ」。その「もつ」は属格ないし所有格と同じ機能をもつ von（英語の of に相当）の訳である。

二 原語の außerdem は最初の文で最終的に述定された「無限に豊かな認識」を承けると解する。

感覺的確信 (sinnliche Gewissheit)

「感覺的確信」はヘーゲル関連での慣用語であり、この文の骨格だけを示すなら前掲①のように「感覺的確信は無限に豊かな認識である」となる。きわめて単純な構造であるが、しかしこれだけではまったく文意がつかめない。そもそもこの語の意味がよくわからない。訳文では文脈から意味を推測できるようにはなっていない。それだけでなく、なぜ第二段落が「感覺的確信」ではじまっているのかもわからない。第一段落で取りあげられていた Wissen——それも「直接的な Wissen」——とこの「感覺的確信」との関係がそのままではまったく見えてこない。右の文面から理解しようとするかぎり、この「感覺的確信」は、なんの説明もなく、唐突に文脈のなかに導入されたとしか読めない。

そのようにしか読めないのは訳語が原語の意味を的確に反映していないからである。「感覺的」という訳語では第一段落で提示された Wissen や Aufpassen との関係が見えてこない。おそらく原語の sinnlich に適切な訳語がなく、それで「感覺的」と訳すことが通例となっているのであろうが、まったく便宜的なこの訳語のために文意も文脈も不明になってしまっている。「確信」も同様である。この訳語のために Wissen との関係が見えず、それで唐突に文脈のなかに導入されたとしか読めない結果になっている。ヘーゲルの言わんとするところをとらえるためには、「感覺的」と「確信」の意味を原語から掘りおこす必要がある。前者の語義から文意と文脈の検討にはいることにしよう。

感覺的 (sinnlich)

「感覺的」の原語 *simnich* は名詞 *Sim* に形容詞語尾の *nich* をくわえた語である。語尾の *nich* は名詞につけくわえられて「〜に属する、〜にかかわる、〜の性質の、〜のある、〜による」などを意味するが、どの意味で解すべきかは名詞の意味とその名詞がおかれた文脈に依存するので、ここでの検討の対象はさしあたり名詞 *Sim* に絞ってよからう。ただ、語義が語義なので、視野を広くとって検討することにする。

ドイツ語の名詞 *Sim*、英語の名詞 *sense*、フランス語の名詞 *sens*、この三語には、①見る聞くなど感覚器官に固有の働き、②その感覚器官の働きと結びついて感情や思考やものごとの意味を統合的にとらえる働き、③感覚器官の働きと結びつかずにも、ものごとを判断し統合的にとらえる働き（理性などの知的能力の働きと言いかえることのできる働き）、④「人生の意味」などその知的能力の働きがとらえることはできるが、あたえることはできない、ものごとの意味をとらえる働き、⑤ことばの働き、大別してこの五種にまとめられる働きが意味として共通に存在する。^二

しかもドイツ語の *Sim* とその動詞 *simen* とは、英語の *sense* やフランス語の *sens* とそれに対応する動詞を近代にもたらしたラテン語の *sentire* (感じる) と語源的に同一で、辞書には印欧基語 **sent-* にまでさかのぼったときの原義が「ある方向に進む」と打ちだされている。^三 これは生活ないし物理空間のなかでは「行く」や「旅

一 考える能力に意味を見つけることが可能なのか、意味を見つける能力が考える能力の背後で働いているのではないか、このような問題は後に検討する。

二 この五種の働きを英語の *sense* と *reason* との関係でまとめたものは後に参考として記す。

三 基本的な単語の語義を知ろうとすると、どうしても語源を見る必要がある。欧米語の場合なら印欧基語にまでさかのぼることが不可欠である。

1 する」ということであるが、進むべき方向が心中となった「知覚する」や「意味する」や「理解する」なども打ちだされていることは注目にあたいます。「感じる」とは周囲のものごとを感知し、その意味を受けとめ、理解する働きであるということが明瞭に打ちだされているからである。

5 その意味を現在に伝える *Sinn* と *sense* と *sens* の三名詞は、身体をもった生身の人間が感じ考える活動を端的に一語で示唆する。この活動こそは第一段落で五感の働きとして理解したものであり、ヘーゲルの説明では *Auffassen* が担っていると考えることのできた活動である。「はじめに」の内容にまでさかのぼるなら、それは多層多層の存在である人間が立ちあらわれてくる基盤に存在する心にはたらく活動になる。したがって *sinnlich* を色や形や刺激をとらえる働きと受けとめやすい「感覺的」で訳すことはまったく不適切である。

10 確信 (*Gewißheit*)

次に検討しなければならないのは「確信」と訳される *Gewißheit* である。これは *wissen* の派生語 *gewiß* に名詞をつくる語尾 *-heit* を加えてできた名詞である。第一段落における *Wissen* と同じく、このように形容詞から名詞を作る場合にも、注意が必要である。「確信」といった簡潔な訳語からは、名詞が意味を得てゆく思考プロセスが見えてこないからである。これは翻訳ではまったく見えてこないプロセスで、翻訳を読んでいるだけではそのようなプロセスがあるということにさえ気づかないで終わることがめずらしくなく、そのためなおさら注

1 *sinnlich* とその訳語「感覺的」との意味上のずれを考慮して、以後この語は訳出せず、そのまま *sinnlich* と記し、訳語をたす必要が生じたときには原語と訳語の双方を記すことにする。

1 意が必要である。

5 と言ってもプロセス自体はすでに述べた動詞から名詞をつくる場合とほとんど変わりがない。形容詞からつくられた名詞は基本的に、①「 \sim している状態にあること、 \sim の性質をもっていること（その事実）」、②「その状態や性質をもつことによって生まれたもの」の二義を帯びる。変更は品詞の違いに対応し、「その事実」という補足は文脈に応じて変える必要がある。

10 こうした形容詞のひとつである GewiBheit が①として「GewiBしている状態にあること」の意味をもつのは当然であるが、②は二義に分化する。「GewiBの状態で心中に抱かれているもの」と「そのように心中に抱かれているものに対応する現実の事態」である。前者は心中に存在し、後者は外界に存在する。両者は存在する領域が異なり、訳語の「確信」を日本語として見た場合には後者の意味が存在しない。日本語を母語とする者にとつてはそもそも後者の意味が可能であること自体が考えがたい。このような事情があるので、両者を区別するため、前者を②とし、後者を③としよう。

15 一 ここに指摘した二面への分離と存在する領域が異なる点、それに訳語が双方を意味するのか、一方だけを意味するのかという点は、どちらも個別に見なければならぬ。わかりやすい場合を英語の動詞 building で例示する。①は「建設すること（＝建設）」であるが、第二義は「実際に建設された建物」しか意味しない。日本語の「ビルディング」は①を捨て、なおかつ分化した②は意味上あり得ないので、③だけを意味する名詞になっている。形容詞の場合は後にとりあげ「真実 (Wahrheit)」を参照のこと。ここで指摘した問題は第一段落にびてきた「直接的」の名詞 Unmittelbarkeit を「直接性」と訳すか「直接態」と訳すかの問題にもからんでくる。

1 がある。gewißが語源的にwissenの過去分詞gewußtと密接な関係をもつ形容詞だという点である。gewißは行為の完了の念をふくんでいるのであり、その念が現在にまで引きつがれている。「知った」が「知る」という行為の完了を意味する「知ってしまった」になるのは生活のなかでの自然な成りゆきであろう。その「知ってしまった」が「はつきり知った」や「うたがいようもなく知ってしまった」と転じてゆくこともきわめて自然な成りゆきである。「そのように知ること」「そのように知った状態で心中に抱かれているもの」「その状態に対応するうたがいのない現実の事態」これがGewißheitの基本的な意味である。

5 10 これで第一段落の冒頭に提示されたWissenとの関連が明瞭になる。日本語訳で提示される「知」と「感覚的確信」はドイツ語ではそもそも緊密で明瞭な関連をもっていたのである。原語と訳語に一对一の対応をもとめようとする翻訳の欠点があまりにも明白になることに驚くほどである。

15 さらに、辞書によるGewißheitの定義からは、SinnとWissenの密接な関連まで浮かび上がってくる。その意味が「確実な感じ (Gefühl)」や「うたがい得ない理解 (Wissen)」とあるからである。双方とも前記の②に

一 辞書の記述では gewußt と gewiß が同義だった時期があると読める。おそらく後に概念の分化が生じて一方は過去分詞になり他方は形容詞になったものと推測される。

二 それでも訳語として利用する理由は後に述べる。なおこの欠点は英仏訳にも指摘することができる。英語の certainty とフランス語の certitude では、この緊密な関係が示されない。

1 分類される意味であるが、この二義は異なる二冊の辞書に記されている定義を訳出し、その定義のなかで意味の中心をなす語を丸括弧のなかに書き写したもので、Gewiltheitという同一の語の定義にfühlen（感じる）の名詞 Gefühl 又 Wissen の双方がもちいられていることが着目すべき点である。

5 fühlen は英語の feel に相当し、単に触覚の働きを示すだけではなく、心で感じる——心でもものに触れる——働きをも示す。その働きには明確な判断をくだす以前の思考活動もふくまれる。考えぬく以前の段階で「なんとなくそう感じられるのだが」などといったように、ある事柄にたいしていただく一応の理解である。この語義は生活のなかでの感じ考える働きをよく反映しており、実質的に Sinn の動詞 sinnen の意味とかさなってくる。違いは心の働きのどの面を前面にだすかにある。

10 その fühlen が wissen とともに名詞化されて Gewiltheit の定義にもちいられるということとは、第一段落の冒頭でヘーゲルが対象にすぎた Wissen の動詞 wissen 又 fühlen および sinnen とに意味のかさなるところがかなりあることを示唆する。第一段落と第二段落が密接に関連しあっていることはもはや疑いない。問題はこうした関連をもつ Gewiltheit がなぜ「確信」と訳されてきたかにある。

以下、生活のなかでの人間のふだんの在り方に眼を転じて「感じる」という働きを確認し、次いでその結果を語学の知識を利用して明らかにした事柄と関連させ、「確信」にかかわるこの疑問を解くことにしよう。

「感覺的確信」の意味するところ

1 対象の Wissen や Gewiltheit が広範な認識活動を示すので、ここでは意図的に捉え方を広く粗くとつてある。

1 人間は身体がなければものごとを感じることができない。しかも自分に身体があることをうたがう者は皆無である。その身体を介して感じとったものが現実に存在することもまた、だれもうたがわない。その感じるものは色や形あるものだけではない。火にあたれば暖かさと同時に心地よさを感じる。いつもは人のいない部屋に人の気配を感じることもあれば、蕭条とした秋の高原に侘びしさを感ずることもある。こうした無数のものごとが織りなす現実の世界が存在することもまた、だれでもうたがわれない。自分がいつかその世界からいなくなることはあっても、世界自体は存在しつづけるだろうと信じてうたがわれない。これほど強く「うたがわれない」ということは、感じとったものが現実が存在することを「確信している」ということでもある。

5
10 この確信はもちろん考えぬいた後に生まれた確信とは質的に異なり、あまりにも当たり前であるために抱いていることさえふだんは自覚しない確信である。しかし常にこのレベルから意識をたもっていなければならぬとなれば生活自体が成り立たない。これが「感じる」という働きに着目して人間の言動をながめたときに確認できるふだんの人間の状態でありその理解である。その状態と理解は基本的に名詞にもひきつがれる。つまり Sinn などの三語の示唆する活動は現実にもごとが存在することを確信する働きと一体になって機能している。

15 以上の考察にもとづくかぎり、この一体となって機能している Gewibheit が「Sinn のかわる (sinnlich) 確信」となる。この確信は生身の人間が五感の働きをとおして周囲のものごとをたいしていただく確信である。この面を語義にくみ込むなら、前記①～③は、①「身体をもった生身の人間の感じ考える活動が現実のものごとの存在を確信しながら働いている状態にあること」、②「この活動がそのように確信しながら働いているときに心中

一 ここでは語尾の -ich の意味をきわめて広く受けとめておく。さらにこのように限定すべきかは Sinn と確信との関係を検討して初めて可能だからである。その場合、辞書に記載されている意味だけを根拠に訳語を決めることはできない。

1 に生まれ抱かれているもの」③「そのように心中に生まれ抱かれているものに対応する現実のものごと」の三義で理解することが可能である。

5 それなら、ヘーゲル関連の文献で「感覺的確信」と訳するのが通例となっている *simuliche Gewiſſheit* は、内容の点で第一段落で提示された「直接的な Wissen」と実質的になんら変わりがないが、ヘーゲルは *simulich* と限定することで——それに「現実のものごとの存在を確信しながら働いている」面を前面にだすことで——これからその Wissen を *Sinn* にかかわる側面からとらえようと言明していることになる。(訳文では) 段落冒頭に「感覺的確信」と記しただけで先に進み、そう明言しないのは、第一段落の冒頭で Wissen を提示したときと同一の叙述方法と見てよい。他方、第一段落で提示された「直接的なもの」や「存在するもの」は、これまでの検討過程で記した「こうした無数のものごと」に対応し、右の語義では③に対応する。

10 それが第二段落におけるヘーゲルのことばでは感覺的確信の「具体的内容」になるわけであるが、実際には無

一 「感覺的確信」と訳される語を①③で理解し表示するなら、簡潔かつ一語でしめす表現がなくなり、叙述が煩雑になる。これは明らかに欠点である。しかしだからといって、Wissen や *Sinn* のように短い単語ひとつではないので、日本語を母語とする人を読者とする本書でその都度ドイツ語で表記することが適切であるとも思えない。第一段落における「知」と同じく「感覺的確信」は便宜的な訳語ではないが、そうであることを承知してもちいるなら理解の狂いは最小限におさえることができるであろう。以後はそのつもりで「感覺的確信」をもちいることを了とされたい。従来の翻訳書が不都合を承知でこの訳語を採用しているのも同じ理由によるのであろう。読者は翻訳につきまとうこの種の不都合を承知して読むことをとめられていたわけである。もちろん読者のなかにはその要求は過大だと考える人も少なくないであろうが、翻訳からこの種の要求を全面的に排除することはできない。したがって要求が課題であると考えるより、翻訳は外国語の習得からテキストの理解にいたる活動の連鎖をなす輪のひとつと考えるほうが適切である。

数にある「具体的内容」をヘーゲルは単数で記す。なぜなのか。加えて、「具体的内容」は、これまでの検討を承けるなら、③の意味の *Gewißheit* であらわすことも可能で——だからそのかぎりでは「感覚的確信の具体的内容」と書きわけられる必要もないのに——ヘーゲルは書きわけられる。なぜなのか。

5 ここでは欧米語の単数と複数の用い方を手がかりにして最初の疑問にたいする答をさぐり、次いで「内容」の意味を検討することしよう。書きわけた理由はその検討の過程で明らかになるであろう。実際に最初の疑問を検討するときには第二文の「具体的内容の広がるものとしての空間と時間云々」も併せて検討する。この文は具体的事例というにはあまりにも一般的であるが、感覚的確信が無限に豊かな認識である理由を説明する——なしその事例となっている——文と読めるからである。

具体的内容 (der konkrete Inhalt)

 欧米語の場合、ある名詞で示されるものが複数あっても、その数がおびただしくて数える気持ちになれないときは、その名詞を単数で示す。これが単数と複数の使いわけに見られる原則的な思考で、野原の雑草はその好例である。

 数える気持ちになれなければ数えないのは当然であろう。数が歴大でも質が数種なら複数の表現が可能であろうが、「具体的内容」は実質的に多種多様でおびただしい数の要素からなる。数だけでなく質的相違も歴大である。「内容」は数的表現にかんするこの原則的思考にそくして単数とならざるを得ない。だからこそ「その一片

1 を……」という言いまわしも可能になる。「一片」は数えないものの一部を指す語である。

今度は語義の検討にうつろう。「内容」の原語 Inhalt は通常「内部にかかえたもの・たもっているもの」を意味する。「壘の中身」がその一例である。この意味で「内容」を受けとめるなら——そしてそう受けとめるのが自然であるが——「感覚的確信の具体的内容は……」とある「感覚的確信」は、前掲①の「身体をもった生身の人間の感じ考える活動が現実のものごとの存在を確信しながら働いている状態にあること（あるいはその状態にある Wissen）」を意味し、「具体的内容」は②「この活動がそのように確信しながら働いているときに心中に生まれ抱かれているもの」を意味すると受けとめるのがまた自然な理解となる。

5
10 しかしそう理解すると「具体的」がどうにも処理できなくなる。この「具体的」にことさらな説明は記されていない。しかしこれは「具体的内容の広がるものとしての空間と時間のなかで」との相関で、だから「直接的なもの」や「存在するもの」との関係で理解するべきである。

15 へーゲルが「直接的なもの」と呼ぶ現実の「無数のものごと」は、そもそも、感覚的確信が「内部にかかえるもの」になり得ない。「具体的内容」を右のように②「身体をもった生身の人間の活動が現実のものごとの存在を確信しながら働いているときに心中に生まれ抱かれているもの」と理解すると、その理解はどうしても「具体的内容の広がるものとしての空間と時間のなかで」と齟齬をきたしてしまう。「直接的なもの」が語義の③に対応するという十二頁の検討結果とも齟齬をきたす。

一 「一片」はドイツ語で Stück、英訳では fragment あるいは bit、仏訳では fragment。

二 原語は konkret。英語で concrete、フランス語で concret。なお「内容」は英語で content、フランス語で contenu、基本義はドイツ語の Inhalt と同じである。

こうした齟齬はヘーゲルが「感覺的確信」の語義を①③に分けて理解してはいないと考えれば解消する。ヘーゲルは日常の卑近な意識を対象にしており、その意識をこのような未分化な状態ないし一体となった状態ととらえることは、周囲のものごとくに反応しながら感じ考えている人間の在り方をとらえるために不可欠の前提である。この前提があつて初めて「具体的内容の広がる」という表現がなりたつ。原文でこの部分にもちいられている *ausbreiten* の再帰用法は「眼前にすばらしいパノラマが広がる」などと語るとき「広がる」である。山頂に立ったときからパツと眼前に広がったパノラマに心奪われるまでは一気である。そのようにすばらしい光景をながめる者が①③を区別しながら光景を愛でることなどはありえない。

それなら生活者が「山頂に立った私のまえに広がるパノラマは……」と語るようにヘーゲルが「感覺的確信の具体的内容は……」と記すことに異論があるはずはない。これは実質的に「生身の人間の感じ考える活動が存在を確信している無数のものごと（直接的なもの）は……」と同意である。

問題はこう語ったときにヘーゲルがもちこんだ判断にある。具体的には「それ〔感覺的確信〕を直接的にも、とても豊かな認識として、いやそれどころか無限に豊かな認識としてあらわれさせる」とあるなかの「もつとも豊かな」や「無限に豊かな」である。この判断を導入したのはヘーゲルである。ところが卑近な日常の意識は感覺的確信（自分をとりまく世界とその理解）が無限に豊かであるかどうかを考えないところで成り立っている。ヘーゲルの判断と日常の卑近な意識とのあいだには明らかにズレがある。

ここは大切な点である。「無限に豊かな」を原文の構造にそくして訳した「無限の富」は、文字どおりには認識に帰属する。しかし日常の生活はその富（ないし豊かさ）が認識に属するか現実には属するかの区別をしないところで動いており、普通はその区別を意識にのぼせることさえない。だれもが生身の人間として感じ考え、その

活動をとおして現実のものごとの存在を確信しながら（以上が Wissen と Gewißheit に相当）、強いてそう意識することもなく、またその現実にとりかこまれていることも普段はとくに意識せず（①③の区別を意識せずに）、あるとき（時間）あるところ（空間）に存在している。このなんの変哲もないあたりまえの状態にある人間の Wissen なし Gewißheit をなぜヘーゲルは「無限に豊かな」と形容するのか。

この疑問を解くために、その理由を説明すると読めた第二の文「その具体的内容の広がるものとしての時間と空間のなかで、私が〔たまたま自分の存在する時と場から〕外へ出てゆくときにも、この充溢した豊かさから一片を自分のために切りとり、その一片のなかに入_つてゆ_くときにも、その無限の豊かさにはどのような限界も見いだすことができない」を検討してみよう。「広がるものとしての」はニュートン物理学における空間やカントの述べる空間ではないという断りと解して、空間から検討することにする。

「具体的内容のひろがるものとしての空間」とは、たとえば被考察者ヘーゲルの存在する空間である。具体的にはたとえばヘーゲルが仕事をしている部屋である。ヘーゲルがその部屋から「外へゆくとき」、空間は居間や台所につづき、それはさらに外部空間である庭や通りへとつづいてゆく。その向こうに街並みがあり、さらに果てしなく、どこまで続くかもわからない空がある。時間の場合も同様である。ヘーゲルが『精神現象学』の完成を将来に期すことは、「具体的な内容の広がるものとしての時間のなかで、ヘーゲルがその内容の外へ（執筆中

一 仏訳はこのドイツ語の表現にそくして se deployer をもちいているが、英訳はだいぶ表現を変えており、厳しくみなら誤訳である。なお、原文で時間と空間が ausbreiten ひとつで処理される理由は、時間を脳裏に想い描くときをふりかえれば理解できる。そのとき時間は線条に想い描かれている。この想い描き方は空間のそれと実質的に異ならない。

二 「自分のために」は三格 uns の訳である。適訳ではないかもしれないが、この三格は利害関係の与格と解する。

1 のある時点から未来へ、それも想念のなかで「ゆく」と言いあらわすことが可能である。(表現がぎこちなくなるのはヘーゲルが時間と空間をひとつの語で処理するからである。)その将来は宇宙がつづくかぎり無限につづく。逆に家族の写真(当時なら肖像画)を見てあれこれの思い出にひたるのは、無限にさかのぼることが可能な過去の「一片を自分のために切りとり、その一片のなかに入ってゆく」ことに相当する。

5 空間も時間もこのようにたしかに無限であるが、無限であるのは空間と時間であり、その空間と時間のなかに広がる具体的内容は必ずしも「無限に豊か」であるわけではない。被考察者ヘーゲルが台所で無限の豊かさを感じたとは考えがたい。

10 そもそも、考察者ヘーゲルが空間と時間の広がりをどれほど「充溢し」どれほど「無限に豊か」であると語ろうと、個々人の生活はある限られた環境のなかにあり、だれでもその生活をのぞいては自分の存在を考えるとできない。想像のなかでどれほど豊かな現実を想い描こうと、どれほど空想に耽溺しようと、実のところそうした状態を自分が足をおろしている現実より豊かであるとは考えていない。日々の生活をいとむ現実——ふだんは淡々とながれ時に急変の生じる現実——が基盤にあつてそうした想像も空想も可能になっており、しかも生活はその現実を「充溢した」とも「無限に豊か」であるとも捉えないところで過ごされる。どれほど社会や人生を厭い無意味なものと呪つても、生きていくかぎり、その状態には無条件の肯定が含意されることになるが、その無条件の肯定もふつうは意識されない。これが端的な事実である。ヘーゲルの説明は日常意識とのズレを説明しない。

15 そうであれば、ヘーゲルが「sinnlichな確信」と語ることをさまたげるものはないが、その確信を「無限に豊かな認識」や「充溢した豊かさ」と形容するのは、対比項を日常の意識にとつて検討するかぎり、明らかに

1 に誇張である。当然、第三の文「これ〔この確信〕はそれだけでなく〔そのように無限に豊かな認識であるだけでなく〕もつとも**真実の認識**としてあらわれる」とあるなかの「もつとも真実の」も同様に誇張となる。

5 この誇張は第二のまとまりにでてくる「もつとも抽象的でもつとも貧しい」と対をなす。ヘーゲルには当初からどんでん返しをする意図があり、だから最初に「もつとも豊かな」や「無限に豊かな」と語り「充溢した豊かさ」と誇張的に記すのである。次にどんでん返しがあるのだから、この三つの誇張的表現はまったく自覚的かつ意図的なものである。筆がすべったということはありえない。

10 当然その意図が問題になる。その意図が明らかになり、それなりに納得ができるなら、種々問題がのこるとしても、あるいは新たな疑問が次々に浮かんでくるとしても、少なくともこうした表現を誇張と受けとめる必要はなくなる。その意図に *intention* がからんでいることはすでに述べたとおりであるが、しかしその意図を探るのはまだ早い。それ以前に確認しておくべきことが色々ある。

第一は「あらわれるがまま」と「直接的」である。この二点を再考するなら、ヘーゲルの描いていた構図がきわめて鮮明になってくる。それでこれまで不明確なままだった点を確認することができるようになる。だからまず両者を再検討し、次いで構図を確認するという手順で進むことにしよう。

15 「あらわれるがまま」と「直接的」の再考

日常の卑近な理解に照らすかぎり、ヘーゲルは対象にすえた *Wissen* をあるがままには捉えていない。ヘーゲルの誇張的な判断と日常卑近な意識とのあいだのズレはヘーゲルがみずから生みだしたものである。このズレがあるかぎり第一段落でヘーゲルの主張した「あらわれるがまま」は成り立たない。少なくとも——日常の意識に

1 照らすかぎり——この「あらわれるがまま」をヘーゲルの語るとおりに受けとめることはできない。一頁で指摘した「構図」はもう対象を現象するものと見るヘーゲル自身の一連の思索を示唆するものと断じてよいが、こうなるとあらためて冒頭の文中にある「直接的に」も再考しなければならなくなる。

5 ヘーゲルは第二段落の冒頭で「感覺的確信の具体的内容は、それ〔感覺的確信〕を直接的にもっとも豊かな認識としてあらわれさせる」と記していた。この「あらわれさせる」は使役である。「直接的に」その作用をするのは具体的内容である。つまり動作の主体は「具体的内容」であり、「直接的に」はその「あらわれさせる」様態ないしは仕方を指す。現実の無数のものごとが五感を介して Wissen ないし「感覺的確信」に作用する仕方を指す。

10 文の構成から見ても、これまでにヘーゲルの提示した認識活動のなかで、直接的にはたらくのが五感だけであるという点からも、このように見なければならぬ。そう見てよいことを確認するために、あらためて第一段落の内容をふり返っておこう。

15 考察者はヘーゲルであった。そしてそのヘーゲルがものごとを知ったりわかったりする活動を、ヘーゲル自身は「概念的把握 (Begriffen)」と呼んでいた。その概念的把握の考察対象が「知 (Wissen)」である。これは生身の人間の「知る活動」や「その結果 (知識・理解)」を包括的にあらわす語であると解しておいた。ヘーゲルはその生身の人間が Auffassen (理解) という活動をする¹⁵と見なしていたが、その Auffassen は Begriffen と同じくものごとを知ったりわかったりする活動と考えることができた。だれもが日々あらたなことを知ったり、あれこれ考えたりしながら生活や仕事をしているのだから、そう見るのは当然であろう。

ただ、ヘーゲルはみずから導入した以上の Begriffen と Wissen と Auffassen の働きを、まだまったく説明し

1 ていない。明確にわかるのは辞書から得られた語義だけである。そのため Wissen と Auffassen の関係も正確なところはわからない。Begriffen と Auffassen が「ものごとを知ったりわかったりする活動」であるという理解もまったく暫定的なものである。それでも、ヘーゲルの記した文章の内容を整合的にとらえるためには、このように考える必要があった。

5 他方で、対象となる Wissen には（生身の人間には）生物の一種として五感が作用して（そなわって）おり、ヘーゲルはその五感をそなえた生身の人間の卑近な日常を考察の前提として考えると考えることができた。残念ながら五感と Auffassen の関係もまだ不明のままであるが、Wissen に Auffassen と五感のふたつの働きがかかわっていることはまちがいない。

10 前者の Auffassen がはたらくには意志の働きがなければならぬ。Auffassen は語義が「しっかりとつかむ」であり、「つかむ」がそもそも能動的な働きだからである。そうであれば Auffassen の活動は「**感覺的確信の具體的内容は、それ〔感覺的確信〕を直接的にもっとも豊かな認識としてあらわれさせる**」に関与しないと見なければならぬ。とすれば「直接的に」はたらくのは、のこった五感以外にない。

15 ただ、そのときの五感の働きは、見ようとしてもしないのに物が見え、聞きたくなくとも音が聞こえるときなどの感覚器官の働きである。それも個人差を考慮する必要のないレベルでの働きである。そのレベルでは音や色や形の微細な差を識別する必要さえない。こうした働きは Sinn などの三語が共通にもつ五義のなかでは①「見る聞くなど感覚器官に固有の働き」（六頁）に相当する。これまでは五感と Sinn と Auffassen を強いて区別せず

1 に検討をすすめてきたが、ここまでくれば違いがはっきりしてくる。

見ようとしないうちにも物が見え、聞きたくないときにも音が聞こえるとき、意志は介入していない。だからそのとき *Auffassen* がはたらいっていないのは当然であるが、*Sinn* などの三語が意味する②～⑤もはたらいしていない。この②～⑤の文言を検討すればすぐ明らかになるように、この四義が現実には適用されるとき、その過程では意志の働きが必要になる。しかし見ようとしないうち云々のときにはたらいしているのは、意志の介入なしにはたらく感覚器官としての五感だけである。だからこそ「**感覺的確信の具体的内容**は、**それ〔感覺的確信〕を直接的にもつとも豊かな認識としてあらわれさせる**」という文の「**直接的に**」を、現実の無数のものが五感（感覚器官）を介して *Wissen* に作用する仕方であると解してよいのである。そしてまた、そのように感覚器官としての五感の作用をうける *Wissen* をヘーゲルは *similich* な「**確信**」と呼んだと解さざるをえない。

10 ヘーゲルは「**感覺的確信の具体的内容**は、**それ〔感覺的確信〕を直接的にもつとも豊かな認識としてあらわれさせる**」と記すことによつて、そうしたときの五感の働き方が「**直接的**」であることを示す。と同時にその五感が見ようとしないうちでも見えるときなどの感覚器官の働きであることを示す。第二段落で *similich* を導入したとき、ヘーゲルは五感の働きや *Sinn* などの三語がもつ語義のなかで、もつとも基礎的な働きである感覚器官の働きしか考慮していなかったたのである。

15 なぜこの働きがもつとも基礎的であるといえるかは、五感にそなわる種々の働きのなかで身をまもる役割を考

一 七頁「*Sinn*と*sense*と*sens*の三名詞は、身体をもつた生身の人間が感じ考える活動を端的に示唆する。この活動こそは第一段落で五感の働きとして理解したものであり、ヘーゲルの説明では *Auffassen* が担っていると考えることのできた活動である」を参照。

1 えるだけでもわかる。五感は意志とは無関係に常時はたらいいていなければ身体を危険からまもれない。これは生
物体としての人間の存続に不可欠な、センサーとしての五感の働きである。

5 しかしセンサーとしての五感をあつかうなら、同時にセンサーが発する危険信号やその際の人間の感情や行動
もあつかって当然ではないか、という疑問や不満が生じるかもしれない。これは哲学書を読むときに必ずと言っ
てよいほど生じる疑問や不満であるが、もう少し我慢してセンサーとしての五感だけがはたらいっている状態を見
てみよう。

10 その状態は、具体的には、生活者がなにを考えるでもなく周囲のものを感知している状態を指す。たとえ
ば朝に目を醒ましてから日の光を感知して「もう朝か」と思う直前までの状態を指す。頭がぼんやりとして、意
識もはっきりしていない、きわめて短い時間に可能な状態を指す。ヘーゲルが第一段落で設定した *Wissen* の在
り方は、いわば日常卑近な生活のなかにあるこうした意識状態の一瞬のスナップショットとしてしか考えること
ができない。

15 この状態で「直接的に」が *Auffassen* とどのような関係になつていのかをあらためて確認しておこう。第一段
落において「直接的に」は *Begreifen* との関係で導入され、「*Begreifen* の作用がおよんでいない」の意でもちい
られていた。ところがこの第二段落冒頭の文に *Begreifen* はかかわらない。かかわる可能性があるのは *Wissen*
と五感と *Auffassen* である。前二者をもちいてこの「直接的に」の意味を記すなら「*Wissen* をいだけ人間が感
覚器官としての五感以外の自分の認識活動をおよぼしていない」となる。その「五感以外の自分の認識活動」は
Auffassen である。したがって「**感覚的確信の具体的内容は……を直接的にもっとも豊かな認識としてあらわれ
させる**」とあるなかの「直接的に」は「*Auffassen* の作用がおよんでいない状態で」の意になる。

1 では Wissen をいなく人間は何にたいして自分の理解活動である Auffassen をおよぼしていないのか。

5 自分自身と周囲のものごとをたいしてである。これまでのヘーゲルの叙述から Auffassen がおよぼされる可能性のあるものを取りだすなら、「存在するもの」と Wissen だけである。この点は自分がわかつくとしていきの状態をふり返ってみるだけでもすぐ見当がつく。なにかをわかつくするとき、その対象は自分の生きる世界のなかに存在するあれこれのものごとか自分である。その自分はヘーゲルの言いあらわし方では Wissen になる。他方、自分はなにを知っていたのかと自省するときには、自分の Wissen もわかつくとする対象になる。したがってここでの「直接的」は Wissen をいなく人間が現実のものごとと自分の Wissen に自分の認識活動である Auffassen をおよぼしていないと解してよいのである。

10 この理解をくみ込むなら、冒頭の文は「Wissen をいなく者が自分の能動的な認識活動である Auffassen を自分の周囲にも自分の Wissen にもおよぼさないとき、現実の無数のものごとは直接的に、(つまり Auffassen の用がないまま) Wissen に認識される。意志を介さずにはたらく他方の認識能力である五感(感覚器官)をとおして認識される。その五感¹⁵は直接的にはたらいっているので、五感のはたらく Wissen (つまり感覚的確信)はもつとも豊かな認識としてあらわれる」という意味で受けとめることが可能になる。

15 このように書きかえることで文末のきこえない表現も解消するが、ここでは意志の有無が Auffassen と五感に対応していることをあらためて確認しておきたい。

ヘーゲルの描いている構図

これで第一のまとまりの前半の検討を終えることができた。ここまでくれば第一段落からの流れをはるかに明

1 瞭にとらえることが可能になる。と同時に、ヘーゲルの描いている構図が鮮明に浮かびあがってくる。

5 その流れと構図は次のように言いあらわすことができる。——私が冒頭で考察対象にすえた Wissen は「存在するもの（つまり現実の無数のものごと）」にまだその認識活動 Aufpassen をおよぼしていない。だから「存在するもの」は「直接的なもの」である。その Aufpassen は Wissen 自体にもまだ作用をおよぼしていない。だから「直接的なもの」を認識する Wissen は「直接的な知」である。「その直接的な知」に Begreifen はまったく作用していない。だからこれは「直接的に」私の対象となる。感覚器官としての五感の作用をうけるこの「直接的な知」は sinnlich な「確信」と呼べるが、五感の働きを介しているのでその確信は無限に豊かな認識としてあらわれる。——。

10 最後にある「無限に豊かな認識」が日常の意識に照らすかぎり誇張であり、その誇張にどんでん返しのような意図がふくまれることはすでに述べたとおりであるが、逆にどんでん返しのような意図を見ぬけば——これも既述のように——その誇張がヘーゲルにとっては誇張でもなんでもないことがはっきりする。その意図が『精神現象学』全体の構図にかかわっていることもはっきりしてくる。しかしヘーゲルの描いた構図がわかったここでも、その意図に触れるのはまだ早い。それ以前に確認しておくべきことが二点ある。

15 第一は「直接的」が二重の意味でもちいられていることから派生する。Wissen は Begreifen が作用をおよぼす一これです。第二段落の検討で「まずヘーゲルが『同じように』と記した意図がわからない」と述べた（二二二ページ）ときの ebensô の意味が明確になる。これは Wissen にそなわる Aufpassen がはたらいていないから「存在するもの」が「直接的なもの」で Wissen も「直接的な知」であるように、それと同じように私も「直接的」な態度をとらなければならぬ、の意だったのである。「直接的に」も「直接的な」も原文では同一の語である。

1 していないから「直接的に」存在し、その Wissen は Auffassen が作用をおよぼしていないから「直接的な知」として存在するのであった。ヘーゲルは「直接的 (unmittelbar)」を Begreifen との関係でも Auffassen との関係でも、しかも並行的にもちいる。この用い方を見ると、このふたつの活動は基本的に同一であり、ヘーゲルは叙述を明確にするために、対象の認識活動を Auffassen と呼び、自分の活動を Begreifen と呼んだだけのことかもしれないという推測が可能になる。

5 第二に確認すべきことは——確認のためにふたたび記すが——日常の卑近な意識に照らすかぎり、前述のスナップショットの状態は実質的に仮構になるが、その受けとめ方はやはり容易ではないという点である。なぜヘーゲルは日常の意識に反してまで Wissen をこのように設定したのかと問うなら、対比項を日常の意識にもとめて考えるだけでは不充分になり、なによりもまずヘーゲルの文章からヘーゲルの意図を明らかにすることが不可欠になる。それが厄介である。だから見やすいところから見えてゆこう。つまり日常の卑近な理解とのズレから見えてゆこう。

10 日常のなかにある生身の人間は自分の周囲のものとや自分のことをそれなりに理解しながら (Auffassen をはたらかせながら) 生活しており、ヘーゲルの設定した Wissen はその理解とかなり食いちがう。前述の「なにを考えるでもなく周囲のものごとを感知している状態」(二十二頁) は、生活のなかでは、ごく稀に、それも短時間なりたつ可能性があるだけである。生身の人間の理解とヘーゲルの描いた構図との食いちがいは、このままではどうにも修復しがたい。そのかぎりこの構図はやはり仮構であり、ヘーゲルが意図的に「描いた」ものと受けとめなければならぬ。これはヘーゲルがヘーゲルなりに描いた Wissen のモデルになる。

しかもこのモデルはただヘーゲルの脳裏に存在するだけである。ヘーゲルの文章からはまだ叙述の場が生まれ

1 ていない。したがってこれはだれも共有しておらず、ここまで分析して初めて存在することが知られるようになったモデルである。

5 この事態は次のように言いあらわすこともできる。つまり、叙述の場が依然として生まれておらず、そのため多数の人々が生活する現実の世界と結びついていないヘーゲルの文章では、このモデルはまだ読者と共有する現実性を得ていない、と。

10 それにもかかわらず——自分の作ったモデルが読者と共有する現実性を得ていようがまいが、だから生身の人間が日常生活のなかでなにを感じなにを考えようと、その理解がどうであろうと——ヘーゲルはその Wissen に Aufpassen がはたらいっていない状態を設定し、なおかつそう設定した Wissen にまだ Begreifen がおよんでいない状態を「直接的」と呼び、その Wissen があるがままにあると見なし、自分に「あらわれるがままに」概念的把握をしようとする。

15 なぜなのだろう。生身の人間の理解とは明らかな食いちがいを示しているにもかかわらず、なぜそのようなことを試みるのだろうか。この構図なしモデルは生身の人間のふだんの在り方からおそろしく隔たっている。たとえば「はじめに」でとりあげた園児や退職サラリーマンの在り方とこのモデルとのあいだには、今のところどのような接点も見いだせない。そのかぎりこのモデルはおそろしく抽象的な域で練り上げられたと考えなければならぬ。

ところが、こうした指摘が可能であるにもかかわらず、考察者ヘーゲル本人はみずから描いた構図のなかで Wissen が「あらわれるがままに」あると見なす。「私もまた同じように直接的な、つまり〔対象となった〕「直接的な知」をあるがままに」受けとめる態度をとらなければならない。この知が〔私に対して〕あらわれるがまま

1 に、だからそのなものにも変更をくわえず……」と語る。このことばを文字どおりに受けとめるなら、ヘーゲルはみずから叙述した事柄を抽象的であると捉えていないと見なければならぬ。

5 「抽象的」とは対象が「具体的に存在するものから隔たっている」状態を指す。あるいは「種々の事物に共通するものを抜きだして、一般化された」状態を指す。あるいはまた「わかりにくい」状態にあるものを指してもちいられることもある。これが一般の用法である。最後の意味はたしかにヘーゲルの文章に当てはまり、このモデルにも当てはまる。しかし「感覺的確信の具体的内容」とある点を考慮するなら、そして五感（感覺器官）が活動しているとあれば、個別のものこそ提示していないが、ヘーゲルには具体的に存在するものから隔たっているつもりはないと受けとめなければならぬ。

10 加えて翻訳語である「抽象的」の語源的な意味は「ひき抜いた」である。これは当然或る「もの」や「こと」からなにかを「ひき抜いた」である。この意味は右に示した「抽象的」の二番目の定義にあるように「抜きだした」と言いあらわしてもよい。ところがヘーゲルは第一のまとまりの最後で「この確信は対象からいまだなにとつ取りさつておらず、逆に対象をあますところなく完全な状態でそれ自体の前にもっている」と記す。感覺的確信が対象からなひとつ取りさつていないのは *Auffassen* がまだ活動していないからである。しかもこの設定は五感（感覺器官）の働きによって現実性ないし具体性が保証されている。それなら辞書のないし一般的な意味での「抽象的」をヘーゲルの構図ないしモデルに適用することはできない。当然、一頁のように「ヘーゲルの文章はおそろしく抽象的であるが」と語ることでもない。現実との対比でもちいられる「モデル」という言い方自体、ひかえなければならぬ。

15 しかしそうはあつても——ヘーゲルの描いた構図を「抽象的」と呼ぶことができなかつても——それがおそ

1
ろしく痩せていることは否定しがたい。痩せている人を俗に「骨と皮しかない」と形容することがあるが、この形容さえ適用できないほどにその内容は痩せている。そもそも、「充溢した豊かさ」とあるだけでは、どのようなもので「充溢」しているのかさえわからない。「存在するもの」はすばらしいパノラマかもしれない。豪勢な食卓かもしれない。あるいは昂奮の坩堝と化した野球場やサッカー場かもしれない。ところがヘーゲルの叙述からはそうした場に特有の状況や雰囲気があったく伝わってこない。ヘーゲルの語る「存在するもの」はいつたい存在しているのかと問い質したいほどに存在感が希薄である。

5
理由はきわめて明白である。無数に存在し時と場におうじて多様にあらわれる現実のものごとを「存在するもの」とただひとことで言いあらわすからである。同様に、そうした多種多様で無数にあるものごとを知る人間の活動も、多種多様な能力を必要とし、実際の働きも結果も、人や対象や領域によって大きく異なってくるにもかかわらず、ヘーゲルはその活動を *Wissen* とひとことで言いあらわすからである。

10
なんとも奇妙な言いあらわし方である。日常生活のなかでは眼にすることも耳にすることもできないことばの用い方である。しかしどれほど奇妙であつても、この言いあらわし方を一概に否定することもできない。鍵は *simlich* にある。あるいは五感の働きにある。現実存在する無数のものごとは五感に感知されて初めて存在することがわかり、感知された瞬間に「存在するもの」になる。五感がはたらくと同時に「存在する」ものとして感知される。そうして存在が知られたものを叙述のはじめに（第一段落で）「存在するもの」と言いあらわしてならぬ理由はない。その「存在するもの」を「抽象的に」と捉える必要もない。

15
そしてまた、人が人としてあるかぎり、そう感知されて存在するものごとを知る活動がある。これまでの叙述に照らすところ、考察者ヘーゲルはその双方を視野にいれ、前者を「存在するもの（簡略的には「存在」）」と呼

1 び、後者を Wissen (簡略的には「知」と呼ぶ。そして「知る (Wissen)」ないし認識する能力のひとつである五感の働きを介して、その両者を解明してゆこうとする。

5 それなら第一段落冒頭からの叙述はこれから五感の働きを介してその双方に肉付けしてゆこうという態勢を示していたと受けとめることが可能である。コクリとうなずく園児や窓外をながめる退職サラリーマンも「存在するもの」であり、ヘーゲルの語る「存在するもの」はその実際の姿からおそろしく隔たっていたが、ヘーゲルはこれからその隔たりを埋めようとする態勢を示していたと解することもできる。この態勢は、簡略的に「存在と知」とまとめることが可能な対象を、五感の——それも感覚器官としての五感の——働きをおしてわかる範囲から叙述していこう、という構えであると言いあわすことも可能である。ここに『精神現象学』を構想したヘーゲルに固有の思考プロセスを読みとることは充分に可能である。

10 ただ、このようにおそろしく一般的な見方に接すると、他にも「存在と時間」や「存在と無」のように類似した表現があるため、さらに一般化してそれを哲学に通有の思考プロセスと受けとめることが可能になると思えてくるかもしれない。たしかに、卑近な日常のなかでの思考プロセスと対比するなら、この一般化は充分に可能である。しかし過度の一般化は禁物である。こうした表現が典型的に見えるとしても、その拠ってきたる基盤が同一である保証はどこにもない

15 ことはやはり発した本人に還して読まなければならない。そのように読もうとする努力ははじまったばかりである。しかもヘーゲルは自分の Begreifen による認識活動も対象の Wissen の認識活動もまだ動いていない状

— 1 —
ここで第二段落の冒頭の Wissen が知る活動とその結果を区別せず包括的にとらえられていることがわかる。

1 態で対象を設定し、それを *simlich* な面から考察しようという態勢を示しただけである。これまでの説明に即して考えるなら、その設定も態勢の提示も *Begreifen* によっておこなわれていると推測されるが、ヘーゲル自身はまだそこまで説明を進めていない。それでも、さいわいなことに、第一段落からの不可解な文章は一応のところ理解できるところまでかみ砕くことができた。しかも、未解決の問題が一部にのこっているとはいえ、最初のまとまりの前半はすでに検討を終えている。それならもう感覚的確信がなぜ「もつとも真実な認識」としてあらわれるのかの検討に入ってよからう。なにより、この点を検討することによって *Auffassen* の意味が具体的に見えてくるようになり、構図自体の理解もより深まってくる。

もつとも真実の (*wahrfafeste*)

10 ヘーゲルは最初のまとまりの後半で *simlich* な確信を「これ〔この確信〕はそれだけでなく〔そのように無限に豊かな認識と言えるだけでなく〕もつとも真実の認識としてあらわれる」と記す。文末の「あらわれる」は前述のように対象を現象するものと見るヘーゲルの捉え方を示す。「もつとも真実の」は形容詞の最上級で、後に「認識 (*Erkenntnis*)」が省略されている。しかし対比項となる他の確信が提示されていない。そのため哲学的な認識や宗教的な認識よりも真実であると言いたいのかどうか不明である。

15
一 「もつとも真実の」は英語で *the truest*、フランス語で *la plus véritable*、*wahrhaft* は *wahr* (真の) に *-haft* (の) を意味する接尾語をくわえた形容詞。したがって意味の中心は *wahr* (*true/veritable*) にある。仏訳ではドイツ語の *wahr* と *wahrhaft* の違いを訳していない。英訳は *the truest* に同格で *the most authentic* を加える。true が日常語で意味が広すぎるから取った配慮であろう。